

パルテノンフリーズの人物の衣裳についての考察

－騎士の衣装をめぐって－

Consideration on the costume of the figures on the Parthenon Frieze

－the costume of the horsemen－

篠塚 千恵子
SHINOZUKA Chieko

The great variety of the costumes of the figures on the Parthenon Frieze constitutes a conspicuous feature which many scholars point out. In recent years, there are remarkable tendencies and attempts to interpret the representation of this frieze by finding out some regularity and the particular significance of the costumes within their variety. Among these attempts stands out Evelyn B. Harrison's interpretation that the cavalcade of the south frieze could be divided through the costumes into ten ranks of six horsemen according to the Attic 10 tribes and that they might be uniformly dressed within their ranks.

As a member of the Parthenon Project of Japan 1994~1996 whose aim is art historical survey on the building policy of Parthenon with the Grant-in-Aid for Scientific Research, Monbusho (representative of this project is Professor Akira Mizuta), I researched the costumes of the figures on the Parthenon Frieze, observing each slab in detail with my own eyes, making notes of it and photographing in order to establish its description as precise as possible. This research took place in London (the British Museum), in Athens (the Acropolis Museum) and in Basel (Skulpture Halle).

In this paper, I took only the costumes of the horsemen of the west, north and south friezes and attempted to analyse them basing on the result of my observation on the spot and the precedent studies (especially, F. Brommer, *Der Parthenonfries*, Mainz, 1997; E. Berger & M. Gisler-Huwiler, *Der Parthenon in Basel Dokumentation*, Mainz, 1996). As the method of their

analysis I classified them into seven types (①nude type ②only chiton type ③exomis and chlamys type ④chiton and chlamys type ⑤chiton and animal skin type ⑥body cuirass type ⑦ cuirass with shoulder straps type) finding the clue from Harrison's classification of the horsemen's costumes of the south frieze. I made clear the features of the horsemen's costumes of each frieze within these types making their list and showed that Harrison's classification as mentioned above was not always precise. It seems to me agreeable that exists the contrast between the horsemen of the north frieze and those of the south frieze, but what sense has this contrast is the problem to solve in future for me.

パルテノンフリーズの登場人物がまとう衣裳の多様性は、どの研究者も必ずといってよいほど指摘する際立った特色である。女神アテナに捧げた祭（パンアテナイア祭）の行列が主題とされ、登場人物が350人を越えるのだから、衣裳が多様になるのは当然といえば当然かもしれないが、そうした多様性のうちに或る種の規則性や特定の意味を見出し、それらをフリーズ全体の解釈と結びつける試みが近年の研究に顕著な傾向となっている。衣裳の多様性の指摘はあっても、それについて深く突っ込んだ考察はこれまでほとんどみられなかったから、これは新しい観点といえる。分けても、南フリーズの騎馬行進の騎士が6人ずつほぼ同じ服装をしていて10隊に分けられ、この面の行列がクレイステネスの改革によって新たに編成されたアッティカ10部族と関係するというE.B.ハリソンの解釈は、大きな反響を呼んだ⁽¹⁾。

筆者はパルテノン神殿に関する共同研究（「パルテノン神殿の造営目的に関する美術史的実地調査」水田徹東京学芸大学教授研究代表）においてフリーズに登場する人物の衣裳の調査を担当した。この調査は1995年と1997年に大英博物館、アテネのアクロポリス美術館展示室及び倉庫で行われ、これらの美術館以外の場所に所蔵されている作品や未公開作品についてはバーゼルの彫刻館の石膏コピーによって調査した⁽²⁾。

パルテノンフリーズに見られる衣裳の多様性は一言でいえば、登場人物の多様性によっているといえるかもしれない。フリーズには人間だけでなく、神々も、また、アテネの10部族の名祖半神たち（エポニュモイ）も現われているとされる。人間は、ふつうパンアテナイア祭のペプロス奉獻の行列に参加するアテネ市民と言われているが、行列参加者の中には、少数ながらメトイコイ（居住外国人）も奴隷も含まれていると推定され、また近年では同盟市民も参加しているという説が唱えられている（後述）。これらの人間がそれぞれの役割に応じて異なった衣裳をつけて登場していると考えられるが、同じ役割を担った人々の衣裳も一様でないことが多く、さまざまな服装が見られる。それ故、それぞれの役割一灌てん具をもつ乙女たち、供物運び、犠牲獣の付き添い、戦車隊、騎馬隊などに応じた衣裳を個別に考察する必要があると思われるが、ここでは繁栄するアテネ都市国家の栄光の象徴として行列の最も長い部分を構成し、近年議論の対象とされることの多い騎士の衣裳のみをとりあげて、そ

こに見られる種々の服装をタイプ別に分類することを試み、その後で個々のタイプについて概略的な考察を行なうこととしたい。

パルテノンフリーズの人物の衣装については、すでにF.ブロンマーの周到なカタログにも、1996年に出されたばかりのバーゼル彫刻館のカタログにもすでに詳細な衣裳の記述が見られる⁽³⁾。とくに後者には上記の新しい観点から衣裳をとらえ直した多くの新知見がもりこまれている。本稿では、これら2著を踏まえて、上述の共同研究で行った筆者の目視調査に基づく成果を報告しながら、上記の分類に基づいて西・南・北のそれぞれの面の騎士の衣裳にどのような特色が見られるか筆者なりの考察を試みるつもりである。なお、本文中のパルテノンフリーズの石板、人物番号は1994年に公刊されたI.ジェンキンズの著作に従った⁽⁴⁾。

1. 騎士の服装の分類

騎士は南・北面と西面に現われる。その大半が馬を走らせているが、未だ馬に乗っていない地上の騎士もいる。地上の騎士は南面には全く登場せず、北面では最も西寄りの石板XLVIIに2人（N133、N135）だけ現われ（図1）、西面に最も多く現われている。西面では登場人物総数30人のうち、立っている人物は騎士以外の者も何人か含まれており、騎士かそうでないか解釈が難しい場合がある。ここでは服装の分類をするための資料として、暫定的にW4、9、12、15、22、23、25、26、27、29、30を騎士ととすると、西面の騎士は馬上の騎士14人、地上の騎士11人、合計25人、騎士以外の人物は5人（W1, 5, 6, 24, 28）となる⁽⁵⁾。ちなみに、騎士以外の人物は南面に1人（S1）、北面に2人（N90 [図2]、N136 [図1]）現われている。南・北面の騎士は欠損している石板もあるが、それぞれ60人ずつ登場しているというのが大多数の研究者の一致した意見であるから、フリーズに現われた騎士の総数は暫定的ながら145人ということになる。

145人といっても欠損したり摩滅したりして判読できないものも多いから、必ずしも全員の服装を扱えるわけではない。また、細部まで厳密に分類しようとすればきりが無い。それ故、全体的な解釈を下す際の手がかりとなり得るような分類を心がけながら、ここではなるべく

判読できるものに限定して、細かな相違と考えられるものにはこだわらず、いくつかのタイプに分類する方法をとりたい。その際、すでに衣裳の分類が相当進んでいる南面の騎馬隊からみていくことにして、これまでの分類を吟味しながら補足を加えた上で、タイプに分けていくことにする。

全員騎乗の南面の騎士はすでに述べたように、ハリソンによれば、6人ずつの隊が10隊、衣裳によって見分けられるという。バーゼルのカタログ（以下BaKと記載）はハリソンの記述をほぼ踏襲して分類しているので（BaK, P. 110）、筆者の補足をまじえながら表（表1）にまとめてみた。

C隊とK隊は同じ服装のように見えるが（表1を参照）、これについてハリソンはおそらくキトンの色を変えることで区別していたのだらうと推測している⁽⁶⁾のに対し、BaKは同じ服装とみて、ハリソンが10の異なった服装を根拠にしてそれぞれの部族名を名指そうとする試みは確証が難しいと述べている（BaK, P. 110）。部族の特定の名前と服装が結びつくかどうかの問題は措くとして、実際に詳しく調査してみると、BaKのいうように、それぞれの隊の服装はハリソンがいうほど厳密なユニフォームになっているわけではないことが分かった。同じ隊の中でも履物をはいている者がいるかと思うと裸足の者もいるといった程度のヴァリエーションは珍しくないのだが、筆者がここでとくに補足しておく必要があると思うのは、B隊（S8-13）の服装についてである。

他の隊がいちおうユニフォームの印象を与えるのに対し、この隊ではS8の騎士がクラミュスを後ろにやってほぼ全裸であるのに（図3）、相棒のS9は肉体を隠すかのようにクラミュスをすっぽりとまとうという対照を示していることから一様性を意識的に避けているように見える。しかも、S9はクラミュスをすっぽりとまとっているのではたしてその下の上半身が裸体なのか、それとも短キトンをまとっているのかも判別しがたい。さらに、その前の石板〔SIV〕の人物（S10）も二人とは異なった服装をしている。この石板は現在アテネのアクロポリス美術館倉庫にあって非公開であるが、今回特別に調査が許されたおかげで、このことが確認できた。S10はクラミュスのみの服装ではなく、その下にエクソミスを身につけている。この石板部分についてはフェオドル・イワノヴィッチの精密な素描が残っており（BaK, Taf.

124-1）、それによっても確認できるように思えるが、BaKの当該人物の説明にも疑問符付きでエクソミスと記載されている。ブロンマー（Br, p. 75）は「キトンとクラミュス。ただし右胸をはだけけている」としてエクソミスという用語を用いていないが、観察は同じなので、この人物の衣裳はエクソミスにクラミュスと断定してもよいのではないだろうか。S11もS12も破損が甚だしく、クラミュスと思われるひだの痕跡がかるうじて識別できるにすぎない。問題はS13で、左腕を高く上げながら後ろを振り返っているポーズは南面騎士中唯一とされる。この人物の服装については、保存状態がそれほどよくないこともあって、研究者の観察がまちまちである。ブロンマーは胴衣風胸甲（Kollerと記載、Br, p. 76）をつけ、さらにその下に衣のひだが見えると記述している。一方、ハリソンはクラミュスのみの裸体とみなし、BaKも上半身は裸体だが背にクラミュスをかけているのだらうと推測している。筆者の実見では、上半身はたしかに裸体のように見えるが、右腰から下にキトンのひだのような痕跡が認められた。それ故キトンを着ていなお上半身が裸体に見えたとすれば、体にぴったりした胴衣風の胸甲をつけているとしか考えられないから、ブロンマーの記述が正しいのではないかと思う。もしこの観察が正しければ、S13の服装は胴衣風胸甲にキトン（+クラミュス？）とされ、結局、このB隊は南面では異例にも種々異なった服装の騎士から構成された隊ということになる。しかも、南面騎士の中では唯一人のほぼ全裸の騎士（S8）とエクソミス着用者（S10）が含まれていることを考えると、この隊は特別の隊を表すのではないかと思えてくる。

さて、表1に従って南面の騎士の服装を分析してみると、まずは胸甲、兜といった武具をつけたタイプと武具をつけないタイプとに二大別されるだらう。武装タイプは胸甲の種類にはらばらば、胴衣風の胸甲タイプと肩章とブテリュゲス（ブリーツ状の裾）の付いた胸甲タイプに分けられる（なお、兜については、筆者の今回の調査は胴体をおおう衣裳に焦点を合わせていたのでアッティカ式、コリント式といった細かい分類を行っていない。今回の服装の分類はあくまでも衣に重点を置き、被り物、履物は補足的な付属物として扱っている）。武具をつけないタイプは薄着か厚着で、つまり基本となる衣だけか、それに外衣を組み合わせているかでい

くつかのタイプに分けられる。基本となる衣にはキトンとエクソミスの2種が見られ、キトンは袖の有無、長短によって袖無し、短袖、長袖の3種に分けられる。外衣にはクラミュスと皮衣が見られる。その結果、南面には「キトンのみ」のタイプ(C,G,K隊)、「キトンにクラミュス」タイプ(A,D,J隊)、「キトンに皮衣」タイプ(H隊)、「胴衣風胸甲」タイプ(E隊)、「肩章付き胸甲」タイプ(F隊)、「クラミュスのみ」のタイプ(B隊)が見られることになる。ただし、この最後の「クラミュスのみ」のタイプについては、先に述べたように、S9のように上半身をクラミュスですっぽりとおおっているの得上半身裸体なのかキトンをもとっているのか不明のタイプと、S8のようにクラミュスはその下の裸体を見せるための飾りのようなものとして処理されているタイプがある。南面では後者のタイプはS8のみとしても、北面と西面では数が増え、何か特別な意味をもたされて目立つ位置に配されていたりするので、ここでは便宜上「裸体タイプ」という名称で分類することにし、S9は疑問符つきで「キトンにクラミュス」タイプに組み入れることにしたい。これら6タイプの他に、さらに先のB隊についての再吟味の結果をとりいれると、「エクソミスにクラミュス」タイプ(B隊のS10)が加わり、都合7つの服装タイプが見られることになる。この分類方法に従って、残る北面と西面の騎士たちを7つのタイプに当てはめると、北面と西面にはこれらのタイプ以外のものは見られず、すべて表2のようにおさまる。次に各面の服装の特徴をより明確に把握するために表3を作成した。

なお、これらの表にとりあげた騎士はすでに述べたように欠損、摩滅が少なくないため、145人全員というわけにはいかなかった。西面は比較的保存が良いので、一部推測に頼った人物もあるが(W21,26)、25人の騎士全員を分類の対象とし、北面は判読困難の石板が多いため41人(うち1人-N127-重複)を、南面も判読困難の人物が少なくないが、隊ごとに衣裳の統一がほぼなされているという想定の下に、表1の分類に基本的に従って58人(S11,12を除く)を、合計124人(うち1人-N127-重複)を分類の対象とした。

2. 騎士の服装に見られる7つのタイプについて

I. 裸体タイプ

繰り返しになるが、このタイプは正確にいうと完全な全裸ではなく、クラミュスをまとっている。しかし、このクラミュスのみのタイプは全体的に見ると、南面S9のようにクラミュスをすっぽりとまとっているのは例外的で、男性性器まで見せた全裸に近いものが多い。また、全裸に近いタイプは後述のように重要な意味をもっていると考えられるため「裸体タイプ」と命名し、S9のような例は他に見当たらないので、また、クラミュスの下にキトンをもとっていることも考えられるので、表3ではⅣの「キトンにクラミュス」タイプに疑問符つきで分類した。S11,12は保存状態がよくないため、表3では統計の人数に入れなかった。

さて、表2に見るように、全裸に近いタイプは南面では極端に少なく、B隊に1例(S8図3)現われるのみで、北面には6例、西面にはとくに多く9例(W2,4,9,12,22,25,27,29,30)を数える。西面に最も多いのは、ここでの場面が南・北面のように騎馬行進が主題とされているのではないことと関係しているのだろう。ここでは静かに立っていたり(W9図4)、暴れる馬を鎮めていたり(W27図5)、岩に片足をのせてサンダルを結んでいたり(W29図6)と、さまざまなポーズをとった地上の騎士の姿が目につく。それで、ふつうには行進に入る前の準備の場面が表わされているといわれるが、もっとうがった解釈も種々出されている(BaK, p.38)。南・北面のように連続した構図をとらず、一枚の石板ごとにまとまった構図を示し、人物や馬が接合部で切れることがほとんどない特徴も、この面に特別の性格を与えているが、さらに裸体の人物が多いこともこの特殊性を強めているように思う。これと関連して9人の裸体の騎士のうち、W2(図7)を除くすべてが地上の騎士であるのは注目に値する。W2は裸体であることだけでなく、その風になびく縮れた長めの髪にしても左手を高くふり上げて頭にやりながら後ろを振り返ったポーズにしても、西面の馬上の騎士の中では一際目立った存在だが、北面に目を転じると、そこでの裸体の騎士は後ろを振り返っていることが

多いので、何かしら北面との連続を感じさせる。北面の裸体の騎士は6人のうち5人が後ろを振り返り(N89,102,105,113,133)、1人(N120)は異例にもこちらに背を見せ、右腕をふり上げている(図8)。後ろを振り返っているN133(図1)は北面では2人しかいない地上の騎士の一人で、西面の地上の裸体の騎士たちとの連続を感じさせる。いずれにしても、北面では裸体の騎士は60人(推定だが)のうち6人だから比率的には決して多いとはいえないが、逆に着衣人物に囲まれていることでその裸体がいっそう際立ち、動きのある身振りでそれがよけい強調されているので、そこには何か意図が込められているように推測させられる。事実、BaK(p.87)は、これらの人物をキーポイントにしながら60人の騎馬隊をそれぞれ15人ずつの4隊に分けているが、故なしとしないうように思う。南面の騎馬隊は身振りにほとんどこだわらず、衣裳の統一によって隊を分けていたが、ここでは裸体という衣裳と身振りによって隊を分けているといえるかもしれない。北面の騎馬隊がこのようにして15人ずつの4隊に分けられるとしたら、従来からいわれているこの面の行列がクレイステネス以前の古いイオニア4部族を暗示したものという解釈はますます説得力を増すことになるだろう。

ところで、南・北面に表わされた騎士たちの裸体は着衣の騎士たちの間にあってどんな意味をもっているのだろうか。パルテノンフリーズには騎馬隊の場面だけでなく、他の場面にも稀にだが裸体の人物が現われる一戦車に乗った戦士(S79)、戦車隊の行列の整理をしている人物(N65,44)、犠牲の牛を導く人物(S130)、そして少年たち(W6,N136)。東フリーズでは少年エロス(E42)が唯一の裸体人物である。しかしパルテノンフリーズの登場人物のうちで一条もまとわない全裸といえる人物は実はW6の少年だけで、他はすべて衣をつけてはいるのである。騎士たちはクラミュス、残りの人物はヒマティオンをいちおう身につけていることはいるのである。それが裸体になってしまったのは、その時の特別の状況によってであるという理由があるかのように見える。その時たまたま風が吹いたから、合図もしくは号令(?)のために腕をふり上げたから身体が露わになったとでもいうかのように。とくに、馬を走らせている動きのさなかにある南・北面の騎士たちの裸体はこうした一過性の特徴を示しているといえよう。しかし西面の静止した騎士

(W9)(図4)のように一過性の特徴を示していない裸体もある。N.ヒンメルマンは、パルテノンフリーズの裸体について論じながら、一過性の裸体と徳性を示す不変的裸体とを区別し、フリーズにおいて後者が少数であるのはそこでの市民的テーマが関係していると述べている⁽⁷⁾。幾何学様式時代以来長い裸体表現の伝統をもつギリシア人でも生ける市民を裸体で表わすのにはある種の偏見があったので、それを表わす場合には外的な動機づけ、ないしは口実が必要であったというのである。そして、裸体表現はフリーズの祝祭的雰囲気を高めるのに用いられており、それをそのまま現実の描写ととらえるべきではない、たとえばクラミュスが後ろへ押しやられたために裸体が見えている場合、現実にはつけているはずのキトンが省略されていると考えるべきだという⁽⁸⁾。

このヒンメルマンの最後の考察は一つの興味深い問題を提起するように思う。すなわち騎士の衣裳としてクラミュスのみの装いは現実にはあり得なかったのかという問題。もっと具体的にいえば、アテネ騎兵隊の軍装には、年齢や兵役期間の相違によって、あるいは階級によって種類があり、その中にクラミュスのみの装いもあったのではないかという問題。たしかに美術表現が現実そのものの再現ではあり得ないとしても、現実のいくばくかは美術に反映しているのもたしかなことであるはずだからである。裸体表現の問題はここでは問題提起のみにとめる。

II. キトンのみのタイプ

騎士が身につけるキトンは断わるまでもなく丈の短いキトンである。袖の有無、長短によって3種に分けられるが、保存状態が良くないため袖無しか短袖か区別がつかない例も8例(IIcのタイプ、すなわち南のG隊S38-43及び西のW20,21。うち1例W21はキトンのみかどうか疑問符つき)ある。また、キトンの装い方としては帯を一本だけ締めるか(「一重帯」)、先ず一本締めて丈を短くするためにたくし上げた布(袋のようなたるみをつけたこの部分を古代ギリシア人はコルポスと呼んだ)の上からもう一本帯を締めるか(「二重帯」)の2種が見られる。但し、馬上の騎士は手綱をとるため腕を曲げており、曲げた位置がちょうど腰の部分に当たって帯の部分を隠してしまっているため一重帯か二重帯か判別困難な場合がしばしばである。それで、キ

トンの種別は袖に基づいて行ない、帯の締め方は表の細部の補足のところで分かる限り記載しておいた。キトンの分類法としてはまた、素材―布地―の観点からの方法もあり得るかもしれない。ハリソンは時として「ウール製キトン」という用語を用いているが(たとえばC隊)、残念ながら詳しい説明をしていない⁽⁹⁾。しかしよく観察してみると、たしかに素材の異なった、少なくとも2種類のキトンを彫刻家が刻み分けていることがみてとれる。一方は細かい衣紋を示す、おそらくリネン製のキトン(たとえばN88 [図9])、もう一方はよりゆるやかで大まかな衣紋を示し、丈が短かめのキトン(たとえばS57 [図10], N98 [図11])で、ハリソンのいう「ウール製キトン」というのは後者を指すのではないだろうか。注目すべきはこのいわゆるウール製キトンの裾にしばしば三角の切れ込みが入っていることである(たとえばS57 [図10], S59 [図12], N98 [図11] その他多数。クラミュスを上にまとっている場合にも見られる(例S50 [図13])。ウール製はリネン製よりも厚手でごわごわするから、動きやすくするためにスリットを入れてあるのだろうか。この細部表現についてはすでにブロンマーが注目しているが(BrP. 232)、布地についての説明はない。今回の調査でこの「スリット」の有無も気がついた限りではあるが、記録した(平成11年刊研究成果報告書の一覧表及び別表を参照)。中には裾のみならず袖口にもスリットが入っているのがある(たとえばS59 [図12]。S50 [図13]は上にクラミュスをまとっているが、クラミュスの脇の開放したままの側の肩の間から見える)。こうしたスリットはひだとともにキトンの布地を識別する指標となるように思える。ブロンマーはパルテノンフリーズ以外にスリットの表現が見られる例として「マウソレイオン」のアマゾンの衣裳と「アレキサンダー石棺」の戦士たちの衣裳を挙げ、前者には滅多に見られないと述べているが(Br, P. 232, Anm. 9)、マウソレイオンの場合この表現が稀なのはアマゾンの衣裳が主としてひだの細かいリネン製のキトンであることに起因しているように見える⁽¹⁰⁾。いずれにしてもスリットのような細部表現はパルテノンフリーズ以外には珍しく、パルテノンフリーズの衣裳の表現がいかに入念かを例証しているようにも思えると同時に、こうした衣裳表現こそ当時実際に着用されていた衣裳を背景にしてのものではないかという思いに誘われる。そして、もしパルテノンフリーズの衣裳の表現が現実

に基づいているのなら、先の裸体タイプの表現をどのように解釈すべきなのかという問題に再び行き当たるのである。

ともあれ、今回は以上のようにキトンの分類は袖を基本に行なった。表2Ⅱから読みとれる顕著な特色としては、袖無しと長袖が北面に、短袖が南面に集中しており、全体的に西面にはキトンのみのタイプが稀なことが挙げられる。但し、袖無しについては、表2Ⅱaでみると南面にはまったく現われていないように見えるが、Ⅱcの保存が悪かったり、馬の陰に隠れて袖の有無が分からないG隊の中に入っている可能性もあり、また、ⅣタイプのA隊及びD隊のクラミュスの下のキトンにもその可能性があるので、北面だけにしか現われない特徴と一概に言い切ることはできない。短袖もⅡbを見る限り、北面には1例(N103)のみだが、Ⅳタイプのクラミュスの下のキトンに含まれている可能性もあるから、たしかに北面には少なくともⅡタイプは稀だとしても、短袖が南面騎士に特有のものと断定することはできないだろう。それに対し、長袖の場合はまさしく北面にのみ顕著な特色といえる。長袖のキトンは6例(N99 [図14], 101 [図15], 110 [図16], 123, 124, 135 [図17])で、クラミュスとも組み合わせられて現われている。その2例(N79 [図18], N106 [図19])も北面騎士の衣裳であり、合計8例がすべて北面に集中していることになる(BaKは疑問符付きでN100, N109も長袖キトンとしており、これを加えると10例)。この特徴に着目したH. ヴレーデは、神官や俳優、笛吹き、御者などの職業服として用いられるのが一般的な長袖キトンがアッティカ騎士の衣裳として現われるのは異例だとして、イオニアの贅沢と華美を象徴する衣裳と解釈した(BaK, p. 29-30)。そして、この衣裳が北面にのみ現われるのは、純粹にアテネ市民のみで構成されたアッティカ10部族の騎兵隊を表わす南面に対し、北面の行列は宗教的領域においてクレイステネスの改革以後も続いていたと考えられる古いイオニア4部族制を体现したもので、行列の参加者の中に非アッティカ人が混じっていることもあり得るからだという。ここから北面の長袖着用者は古い部族制によってアテネとつながりの深い東方イオニアの同盟市の代表者であろうと推測している。ヴレーデはさらに長袖キトンとアロペキスの組み合わせ(例, N110 [図20])にも注目している。アロペキスは南北西の各面にほとんど偏りなく現

われているが、ヴレーデは長袖キトンとの組み合わせは外国人であることを外見上目立たせる効果をもつものとみなし、トラキア起源であるこの帽子を東方人もかぶることがあるとしている（その例としてリュキアの石棺浮彫を挙げている, BaK, p. 29）。しかしアロベキスに関しては、次のⅢタイプで触れるように、トラキア人を特定する指標とみなす解釈もあり、それによれば、この帽子をかぶった長袖着用者はトラキアの同盟市民ということになる。このように衣裳や被り物で人物を特定する試みにはほとんど常に反証がつきまとう。

長袖キトンはBaK（P. 87）が分けた北面の15人ずつの4つの隊のいずれにも現われている（BaK, P. 90）。それでは長袖着用者は裸体タイプのように隊を分ける際のキーポイントとして配置されているのだろうか。最初の隊（N 75～89）にはキトンのみのタイプは現われず、長袖キトンにクラミュスをまとった騎士が1人（N 79 [図18]）、第2部隊（N 91～105）にはクラミュス付きは現われず、長袖キトンのみの者が2人（N 99 [図14], N 101 [図15]）。BaKの追加N 100も入れると3人になり、3人が並んで行進しているこになり、目立つ）、第3部隊（N 106～120）には先頭集団にクラミュス付きとキトンのみが1人ずつ現われており（N 106 [図21], N 110 [図20]）。BaKの追加N 109も入れると3人になり、やはりN 109とN 110が並んでの登場で目立つ）、第4部隊（N 121～135）には先頭集団に2人（N 123, N 124）としんがりに1人（N 135 [図17]）、合計3人がいずれもキトンのみ着用して現われている。このように見てみると、裸体タイプほどではないにしても、ある程度その配置に工夫がみられないでもないように思える。とくに、最後の部隊のしんがりの人物N 135は地上の騎士として隣の裸体の騎士N 133[図1]とともに北面騎馬隊の騎士の中でもとりわけ目に立つ人物だが、背後に従僕と思われる少年を伴っていることでも際立っている。西面には従僕を伴っている人物が見られるとしても（たとえばW 4）、南北を通じては唯一の、しかも北面騎馬隊のまさに導入を形づくる位置のこの人物が長袖キトンをまとっているのは、果たして偶然であろうか。すでに導入の部分からして北面騎馬隊の特徴をうちだしているように見えるこの騎士は、今まさに少年に帯を結んでもらっているさなかか、あるいは結び終えた後の調整をしてもらっているところと思われる。少年の左肩にある衣は少年のものではなく、騎士のクラミュ

スで、今行なっている身ごしらえが終わったら、騎士はそのクラミュスをかけてもらうのではないだろうか。とすれば、この騎士の服装はキトンのみのタイプではなく、Ⅳのタイプになる。

Ⅲ. エクソミスにクラミュスタイプ

いわば短いキトンのヴァリエーションともいえるエクソミスは、ふつう左肩でだけ留め、右肩をはだけてまとう⁽¹⁾。運動や労働、そして戦闘など激しい動作をする場合にふさわしい衣服だが、パルテノンフリーズには稀にしか現われず、騎士の服装としては表2、3に見るように4例であるし、あとは戦車隊の場面に2例（N 55, N 64）見られるだけである。南面の例（S 10）については先に詳述したとおりである。北面のN 127（図22）は、右腕を高く上げて頭にやりながら上半身を観者の方へ向けた右胸の部分が残念なことにかかなり損傷しているが、右脇下の肌の露出具合から判断すると、右肩では留めていないように見え、エクソミスの可能性が高い。ブロンマーの挿図23、24に載っているステュアート、ウェアスリ卿の素描を見ても、右肩を留めずに、つまりエクソミスとして描かれている。表では疑問符付きに留めたが、エクソミスとってほぼ間違いないだろう。

西面の2人（W 8 [図23], W 15 [図24]）は、エクソミスにクラミュス、ブーツ、アロベキスという装いに、さらには南・北・西面の全騎士中ただ二人、頬から顎にかけて豊かなひげをたくわえていることでも際立っている。とくにW 15は西面の石板の中でW 11と並んで最も幅が広く、しかも西面のほぼ中央に位置する石板VIIIを一人で占めていることでその存在を見る者に強く印象づける。そのため、さまざまな解釈がこれまでに出版されているが（BaK, P. 38）、中でも注意を惹くのがこの人物を騎兵長官（ヒッパルコス）とみなす解釈である。紀元前5世紀後半には種々の古文書資料からアテネ騎兵隊は各部族から100人ずつ選抜された騎兵1000人からなり、これらの騎兵を指揮する者として部族騎兵指揮官（フェラルコス）が各部族から1人ずつ選ばれ、さらに全アテネ人の間から2人の騎兵長官が選ばれて5部族ずつを分掌指揮したことが知られている。騎兵長官は2人いたとされるのでW 8もW 15と同じように解釈されている。一方、H. フォン・ハインツェはその独特の帽子アロベキスに注目して、この二人とやはりアロベキスをかぶっているW 19（図25）

をトラキアの同盟市の代表者、もっと詳しくいうなら、トラキア人の中で最も強大で、紀元前5世紀に威勢をふるっていたオドリュサイ人ではないかと推定した⁽¹²⁾。トラキア人の馬の飼育はホメロスの昔からよく知られていたばかりでなく、紀元前6世紀半ば以降アテネの軍隊にはトラキア民族とスキュティア民族の傭兵が雇われるようになり、この民族の勇敢さと戦闘能力、ぬきんでた乗馬術が名高かったという。また、トラキアの女神ベンデイスの信仰が紀元前5世紀のアテネで公的祭儀とされるほどトラキア人とアテネ市との関係は深かったから、トラキア人がパルテノンフリーズに現われたとしてもそれほど奇異なことではないかもしれない。しかしトラキア人とはこのようになじみ深かったため、その衣裳もアテネ人の間でよく知られ、ゼイラと呼ばれるトラキア風のマント、帽子（アロベキス）、ブーツを身につけるのがアテネの騎士たちの間で流行するようになったことが、陶器画などの美術資料からうかがわれる⁽¹³⁾。それ故、当時のアテネのそうした状況を考慮に入れたとき、フォン・ハインツェの解釈もあり得るとしても、トラキア風の衣裳をつけているからといって単純にトラキア人とみなすわけにはいかないだろう。いずれにしても、フリーズの、とくに北面と西面にアテネ市民だけでなく、同盟市民も行列に参加しているのではないかという問題は簡単には解決できない。

一方、W 8とW 15を騎兵長官とみなす解釈は、この役職に選ばれる人物には経験豊かな年配の男がふさわしいと当然考えられるからパルテノンフリーズの騎士の中でたった二人しかいない有髯の男に帰すのは理に適っているように思う。ここで想起されるのがアゴラ美術館にある大理石浮彫断片（I7167）（図26）である⁽¹⁴⁾。アッティカ10部族の一つ、レオンティス部族の騎士たちが騎馬競技に優勝した記念に建立されたといわれるもので、裏表二面に浮彫が施されており、表の面には、左端に一人の馬上の有髯の男とそれと並んで行進する若い騎士たちの一団が表わされている。裏の面には「レオンティス部族が優勝した」という銘文とこの部族の名前をもじってライオンのプロフィールの像が刻まれていた。断片のため5人の騎士の姿しか残っていないが、有髯の男は部族騎兵指揮官と解釈されている（図27）。青年騎士たちとは異なり、帽子をかぶり左腰に剣を帯びている。衣服もひだの表わし方から見て、青年たちの衣服（Ⅳで後述）とは

いくぶん異なっているように見えるが、左端に表わされた柱の陰に一部隠れているためにエクソミスかどうか、クラミュスをまとっているかどうか、そしてまた帽子の形も判然としない。しかし髯の有無と衣裳によって騎兵隊の中での階級の違いを示そうとしていることが明らかであり、年代は前4世紀初頭とされ、やや時代が下るとはいえ、類例がきわめて少ないだけにこの浮彫断片は貴重な資料といえる。

Ⅳ．キトンにクラミュスタイプ

ここでのキトンはクラミュスをまとっているために袖の状態はほとんど分からない。クラミュスの開放した側の肩口からキトンの短袖を望ませた南面のJ隊や、北面の上述の長袖キトンの例（N 79 [図18] , N 106 [図19]）、クラミュスですっぱりおおわず背へ押しやって両肩をあらわにした西面の袖無しキトンの例（W 19 [図25] , W 23 [図28]）などが分かる程度である。

ここではむしろキトンのみの場合と、それにさらにクラミュスをつけた場合とでどのような相違があるかという問題に触れておきたい。クラミュスはキトンとの組み合わせだけでなく、裸体ともエクソミスとも胸甲とも組み合わせられ、表3に見るように騎士の衣裳として最も頻繁にフリーズに現われる。クラミュスは騎士の衣裳として典型的なものだからこれは当然なのであろう（BaK, P. 90を参照）。そこでクラミュスの有無を問題にすると、この有無によって階級の相違を示そうとしたのではないかといった推測が生じてくる。フォン・ハインツェは西面のキトンのみの人物（W 10 [図4]、W 21 [図29]）を騎士に仕える身分の馬丁（ヒッポコモス）と解釈している⁽¹⁵⁾。その根拠はおそらく衣裳だけに求めているわけではなく、石板に表わされたもう一人の人物が、一方はクラミュスのみの裸体（W 9 [図4]）、もう一方はキトンのみだが兜をつけている（W 20 [図29]）ので、W 10とW 21の衣服の簡素さが強調されていると考えた上でのことと思われる。そうでなくては南・北面のキトンのみの人物も一律に馬丁とみなされることになってしまうが、南面の6人ずつ隊になった人物たちはそのようには決して考えられないだろうから。フォン・ハインツェは西面の場面を他の研究者たちとは異なり、行列の出発の場面としてではなく、ドキマシア（騎士と馬の査定）を含む当時の騎士たちのさまざまな活動を表わし

た場面、つまり南・北面の騎馬隊へは直接連続しない場面と解釈しており、そこからこうした人物解釈がなされたのであろう。キトンのみも騎士の服装であり得たことは、何よりも、先に挙げたアゴラ出土の浮彫断片（図26）が雄弁に証明してくれるように思う。そこに表わされたレオンティス部族の騎兵たちはいずれも短袖キトンしかまっていない（図30）。クラミュスの有無はそれ故、身分の別を示す表徴にもなり得たかもしれないが、単純にそれのみで判断することは危険であり、それぞれの場面や文脈を考慮に入れながら慎重に解釈していく必要がある。

V. キトンに皮衣タイプ

この服装は南面と西面に現われ、北面には全く見られない。南面のH隊のうち確実に皮衣が認められるのはS 44（オリジナルは未見）のみで、残りは上半身が欠損しているものが多いため判断できない。上半身が残っているS 45（オリジナルは未見）はキトンの上に皮衣でなくクラミュスをまわっているように見え、ブロンマーもBaKもそのように記述している。従って、この隊の衣装は全員ユニフォームではなく、異なった服装の騎士が混じっていたわけで、キトンに皮衣がこの隊の目印をなす服装だったかどうか、実ははっきりしない。このように、キトンに皮衣タイプの確実な例はS 44とW 14（図31）のみとなり、パルテノン彫刻ではこのフリーズの騎馬隊以外の場面には現われないように見受けるから、きわめて珍しい服装だといわざるを得ない。しかもS 44とW 14の着こなし方を比べてみると、前者はおそらく右肩をはだけてチョッキのようにつけているのに対し、後者はマントとしてまわっており、両者は素材は同じでも正確に言うと同じ衣裳とはいえない。W 14についてBaKはこの騎士が非アッティカ人、つまり外国人であることをほめかしているのだろうと推測しているが（BaKp. 47）、南面の人物（S 44）については言及がない。こうした皮衣は陶器画ではディオニュソスとその眷族にしばしば見出され、また狩人やトラキアの女神ベンディスも皮衣を身につけた姿で表わされることが少なくないが、騎士の衣裳として表された例はこのパルテノンフリーズ以外にはほとんど例がないのではないだろうか。

VI. 胴衣風胸甲タイプ

戦士の服装としてははっきりと明示されるのは武具を身につけている場合だが、パルテノンフリーズの騎馬隊にはいかめしい武具で身を固めた戦士らしい戦士の表現は珍しい（戦車隊の場面でも兜と楯は恒常的に見られるものの、胸甲は稀である）。武器となるともっと珍しく、大理石以外の素材で別に作られたものがとりつけられていた可能性の余地は残るが、現在のところは剣の存在しか知られていない。剣にしても西面の少数の騎士（たとえばW 4 [図32]、W 12 [図33]）に指摘されているにすぎない。祭の際には武器携行は一部の者にしか許されなかったのだろうか。アリストテレスは『アテナイ人の国制』の中で、古い時代には武器を携えて行列することはなく、民主政治になってから武器携行の習慣が始まったと述べている（18章、4）⁽¹⁶⁾。フリーズは必ずしも現実の祭の再現ではないから、武器の表現が稀なのだろうか。だとすれば、そこには敢えて武装のイメージをかきたてない意図がひそんでいたのではないだろうか。
バクス ロ マーナ バクス ア テーニエーシス
「ローマの平和」ならぬ「アテネの平和」のイメージを盛り込む意図とでもいえるようなものが。

パルテノンフリーズの騎士が身につけている武具は、すでに述べたように、胸甲と兜のみだが、胸甲をつけている者が必ずしも常に兜をかぶっているわけでも、また兜をかぶっている者が必ずしも胸甲をつけているわけでもない。胸甲は、肩章付きとこのVIの体にぴったりした胴衣風のもの2種類に分けられるが、どちらにしても皮製のものを表わしているのか金属製のものを表わしているのか明らかではない。胴衣風胸甲についてブロンマーは二つの可能性があるとして述べているだけで（Br, P. 230）、ハリソンとフォン・ハインツェは金属製とみなしている⁽¹⁷⁾。

へそまでかたどられ、一見すると裸体であるかのように見えるこの胸甲は、キトンの上に身につけただけのaタイプと、さらにクラミュスがつけ加わったbタイプとに分けられる。bタイプは北面と西面には全く現われず、南面のE隊にのみ現われている。aタイプは北面に1例（N 87 [図34]）、南面には確かかどうか疑問の残る1例（S 13）のみであるのに対し、西面には3例（W 3 [図7]、7 [図23]、18 [図25]）も見られる。西面の3例をフォン・ハインツェは軽騎兵（軽騎兵）と解釈している⁽¹⁸⁾。その根拠ははっきりと示されていないが、それぞれの石板に一緒に表わされている騎士の服

装-W3は裸体にクラミュスのみの騎士と一緒にあり、W7とW18はトラキア風の身なりをした騎士と一緒にあると対照させているから、おそらくそれらとの比較でクラミュスをつけた者たちよりも階級が低いとみているように思われる。しかしここでも胴衣風胸甲だけによって単純に階級の標識とするわけにはいかないだろう。

VII. 肩章付き胸甲タイプ

肩章とプリーツスカートのようなプテリュゲスの特徴とするこのタイプもやはりクラミュスの有無によってa、bのタイプに細分される。クラミュスのつかないaタイプは南面のF隊と西面の1例(W11 [図33])だけで、北面には全く見られない。南面のF隊は、S33とS36に帽子をかぶっている痕跡が認められるものの、その痕跡からみて兜ではないことが確かめられるが、西面のW11は蛇と鷲の浮彫装飾と羽根飾りのある立派な兜をかぶっている(BaKによればパルテノンフリーズ中唯一の例)。この騎士が身につけている胸甲も中央にゴルゴネイオンの装飾、肩章の先端に動物の頭部をかたどった装飾が施されるなど、他の胸甲着用者には見られない精緻な細部表現を示している(他には戦車隊の場面に1例-N47-見られるのみ)。このことからフォン・ハインツェはこの騎士を部族騎兵指揮官とみなし、同じ石板に表わされた、やはり兜をかぶった裸体にクラミュスのみの騎士(W12 [図33])を部族騎兵指揮官付きの先駆け(プロドロモス)と解釈している⁽¹⁹⁾。それに対し、J.ボルヒハルトはW11を兜の装飾を根拠に騎兵長官と解釈しているという⁽²⁰⁾。

bタイプは南面にも西面にも現われず、北面にたった1例(N118)が見られるだけである。戦車隊の戦士にも見られないから、フリーズ中唯一の例ということになる。全体的に、北面は南・西面と比べると武装の騎士が極端に少ない-2例(N87 [図34], N118)のみ-が目立っているが、その少ないうちの1例がこのように完全武装に近い人物というのは単なる偶然であろうか。

3. おわりに

以上、ハリソンによる南フリーズの騎馬隊の衣装別の分類をヒントにして、これに改良を加えながら西・南・北の各フリーズの騎馬隊の衣装を大きく7つのタイプに

分け、それぞれの面で騎士の衣装にどのような特色があるかどうかを考察してきた。ハリソンの分類が正確ではないことはすでにBaKも指摘しているが、このことは現地での筆者の目視調査の結果からも明らかとなった。それ故、南面の騎馬隊がクレイステネスの改革によって新たに編成されたアッティカ10部族を象徴するというハリソンの説は根拠が薄くなったが、北面の騎馬隊が裸体タイプによって15人ずつの4隊に分けられるというBaKの解釈は2のIで考察したように十分考慮に値するようになる。南面には裸体タイプと長袖キトンが極端に少なく、北面にそれらが目立っているのは何を意味するのか、ひいては南面と北面とのあいだにコントラストが意図されているようにみえることをどのように解釈すべきなのか、西面の騎士たちは南北のフリーズのあいだでどのような役割をもっているのかといったフリーズ全体の解釈にかかわる重要な問題はフリーズ上の他の登場人物の衣装のさらなる分析を経た上でなくては簡単には論ずることはできないであろう。今後の課題としたい。

注

- (1) E.B.Harrison, in Parthenon - Kongress Basel, Mainz, 1984 pp.230-235
- (2) それぞれの美術館関係者、とくに開館時間外の調査及び写真撮影の許可をはじめとする様々の便宜をはかってくださった大英博物館古代ギリシア・ローマ部門主任研究員I.ジェンキンス博士に、アクロポリス美術館倉庫の未公開フリーズ作品を調査する許可を与えてくださった同館のトリアンティス博士、ギリシア国立考古学研究所のM.コレス博士に心からの謝意を表したい。
- (3) F.Brommer, Der Parthenonfries, Mainz, 1977 (本文で引用する際はBrと略して記載); E. Berger & M.Gisler - Huwiler, Der Parthenon in Basel Dokumentation, Mainz, 1996 (本文で引用する際はBaKと略して記載)
- (4) I. Jenkins, The Parthenon Frieze, British Museum Press, 1994
- (5) W1, 5はヒマティオンをまとった人物なので祭の指揮をとる役人と考えられ、騎士とは考え難い。W6, 24は小さな少年で、おそらく従僕。W28はBrもBaKもキトンとクラミュスをまとっていると記述しているので騎士とも考えられるから意見の分かれるところだろう。馬の世話をしている動作は馬丁のそれのようにも見え、また保存もそれほどよくないので、筆者としては騎士と断定し難い。なお馬上の人物についても騎士かどうか解釈の難しい例があるが(後述)、ここでは暫定的にすべて騎士とみなした。
- (6) ハリソン、前掲書p.232
- (7) N.Himmelman, Ideale Nacktheit in der griechischen Kunst, Berlin, 1990, pp.55-56

- (8) 前掲書 (注7) p.55
- (9) 前掲書 (注1) p.231
- (10) マウソレイオンのアマゾンの衣装に見られるスリットの例としては、R.Lullies, *Greek Sculpture*, London, 1957, pl.215を参照。「アレキサンダー石棺」に見られる例としては、同書、pl.234,235を参照。
- (11) エクソミスについては、N.Serwint, *The Female Athletic Costume at the Heraia and Prenuptial Initiation Rites*, in “*American Journal of Archaeology*” 1993pp.416-422を参照。
- (12) H.von Heintze, *Athena Polias am Parthenon als Elgane, Hippias, Parthenos 2 Die Westseite*, in “*Gymnasium*” 101, 1994, pp.298-301
- (13) トラキア人とアテネとの関係及びアテネで公的祭儀となった女神ベンデイスの祭については、桜井万里子「ベンディデア祭創設の社会的意義」『古代ギリシア社会史研究』岩波書店、1996、pp.335-368を参照。また、トラキア人の衣装については、長田年弘「イメージの社会学—アテナイ陶器画におけるアマゾン図像とトラキア図像—」『人間文化研究 (広島大学総合科学部紀要Ⅲ) 第7巻1998, pp. 79-98及び図1を参照。
- (14) この作品については *The Athenian Agora—A guide to the excavation and museum, American school of classical studies at Athens*, 1990, pp.204-205; J.M.Camp, *The Athenian Agora*, London, 1986, pp.120-121を参照。
- (15) 前掲論文 (注12) p.306-307
- (16) トウキュディデスの記述はアリストテレスの記述と一致しない。彼は民主政以前も武器を携行していたと述べている (『戦史』巻6、56-58)。
- (17) ハリソン、前掲書 (注1) p.231; フォン・ハインツェ、前掲書 (注12) pp.298-299
- (18) フォン・ハインツェ、前掲書 (注12) p.298
- (19) フォン・ハインツェ、前掲書 (注12) pp.306-308
- (20) BaK, p.46にボルビハルトの解釈が紹介されている。

※ 本稿は、文部省科学研究費の助成を受けて1994～1996年度に実施された「パルテノン神殿の造営目的に関する美術史的実地調査」の研究成果報告書『パルテノンフリーズ図像・様式一覧』(東京学芸大学、1999年3月刊行)に載せた論考に一部加筆修正して作成したものである。この調査では水田徹研究代表者及び共同研究者諸氏(福部信敏、小林志郎、桜井万里子、金子亨、増田金吾、長田年弘、宮里明人)に大変お世話になっただけでなく、多くの学問的刺激をいただいたことに心からの感謝の意を表したい。

なお、ここに掲載した図版はすべてこの時の調査に際して筆者が撮影したものである。図版に載せられなかったものについては上記報告書の図像・様式一覧に掲載の図版、注(4)に挙げたジェンキンズの著書の図版を参照されたい。

表1 南フリーズの騎馬隊を6人ずつの10体に分けたときの衣装の区別 (E.B.ハリソン及びBaK p.110に基づく)

隊	人物番号	内 容 ※〔 〕内の記述は筆者の補足
A隊 (第10フュレ)	2-7	トラキア帽 (アロペキス)、クラミュス、キトン、ブーツ (エンバデス)
B隊 (第9フュレ)	8-13	キトンをまともわず、裸の上半身にクラミュス (8はサンダル着用)に背にペタソス)
C隊 (第8フュレ)	14-19	二重に帯をしめた半袖付きキトン、無帽、ブーツ
D隊 (第7フュレ)	20-25	キトンの上にクラミュス、無帽 (21はサンダル着用)
E隊 (第6フュレ)	26-31	半袖付きキトンの上に胴衣風胸甲、腰に巻きつけたクラミュス、ブーツ、〔無帽〕
F隊 (第5フュレ)	32-37	肩章とプテリュゲスのついた胸甲、〔キトン〕、〔無帽〕、〔ブーツ〕
G隊 (第4フュレ)	38-43	アッティカ式兜、〔キトン〕、〔ブーツ〕
H隊 (第3フュレ)	44-45、45 a、45 b 46-47=44-49	二重に帯をしめた半袖付きキトンの上に皮衣、ブーツ、〔無帽〕
J隊 (第2フュレ)	48-53=50-55	ペタソス、半袖付きキトンの上にクラミュス
K隊 (第1フュレ)	53 a、54-58 =56-61	二重に帯をしめた半袖付きキトン (59)、ブーツ、〔無帽〕 (C隊と比較せよ)

表2 〔 〕の内数は確実でないもの ★=保存状態が完全ではないので、必ずしも全員が確認できるわけではないが、暫定的に表1の分類に従ったもの ペタソス△=ペタソスをかぶらず首にかけている

番号	タイプ	内 容	フリーズ面	人物番号と細部の補足	人数
I	裸体	裸体、クラミュス	S	B 8 < ペタソス△+サンダル >	1
			N	89、102 < サンダル? >、105 < サンダル? >、113、120、133、cf・136 (少年)	6
			W	2 < サンダル >、4、9、12、< 兜+サンダル >、22、25 < ペタソス△ >、27 < サンダル >、29 < ペタソス△+サンダル >、30、cf・6 (少年の全裸)	9
II	キトンのみ	a 袖無しキトン	S		0
			N	82<二重帯+兜+サンダル>、83<袖無し+二重帯>、88<二重帯>、98<一重帯>、107<袖無し?+二重帯、サンダル>、111<ブーツ>	6 〔1〕
			W		0
		b 短袖キトン	S	C隊14-19<二重帯+ブーツ>★、K隊56-61<二重帯+ブーツ>★	12★
			N	103<二重帯+ブーツ>	1
			W	10<一重帯>	1

番号	タイプ	内 容	フリーズ面	人物番号と細部の補足	人数
II	キトンのみ	c キトン (袖の状態不明)	S	G 隊38-43 <兜+ブーツ> ★	6
			N		0
			W	20 <兜+ブーツ>、21 (?)	2 [1]
		d 長袖キトン	S		0
			N	99 <一重帯>、101 <二重帯? + サンドル>、110 <二重帯+アロベキス+ブーツ>、123 <帯無し? + サンドル>、124 <二重帯? + ブーツ>、135 <二重帯+ブーツ> cf・79 <クラミュス>、106 <クラミュス>	6
			W		0
III	エクソミスに クラミュス	エクソミス、 クラミュス	S	B10	1
			N	127 < ? ブーツ>	[1]
			W	8 <アロベキス+ブーツ+有髯>、15 <アロベキス+ブーツ+有髯>	2
IV	キトンに クラミュス	キトン、 クラミュス	S	A 隊2-7 <アロベキス + ブーツ> ★、B 9 (キトン?)、D 隊20-25★、J 隊50-55 <半袖+ペタソス>	19
			N	79 <長袖>、81 <サンダル>、86、91 <サンダル? >、95 <サンダル>、96、100 <サンダル? >、106 <長袖+サンダル>、108 <ブーツ>、112 <アロベキス+ブーツ>、116-117 <サンダル>、119 <アロベキス+ブーツ>、121、122 <二重帯+アロベキス、ブーツ>、127 < ? 、ブーツ>、128-129 <二重帯+ブーツ>、131 <袖無し+ペタソス▲>	19
			W	13 <サンダル>、16、17 <ペタソス>、19 <袖無し+二重帯+アロベキス? >、23 <袖無し+二重帯>、26 <ブーツ>	6
V	キトンに皮衣	キトン、皮衣	S	H 隊44-49 <半袖+二重帯+ブーツ> ★	6 ★
			W	14	1
VI	胴衣風胸甲	a 胴衣風胸甲、 キトン	S	B13 < ? 袖無し>	[1]
			N	87 <袖無し>	1
			W	3 <半袖+ブーツ>、7 <袖無し>、18 <半袖>	3

番号	タイプ	内 容	フリーズ面	人物番号と細部の補足	人数
Ⅵ	胴衣風胸甲	b 胴衣風胸甲、 キトン、 クラミュス	S	E 隊26－31〈半袖＋ブーツ〉★	6★
			N		0
			W		0
Ⅶ	肩章つき胸甲	a 肩章とプテリユ ゲスのついた 胸甲、キトン	S	F 隊32－37★	6★
			N		0
			W	11〈袖無し＋兜〉	1
		b 肩章とプリユ ゲスのついた 胸甲、キトン クラミュス	S		0
			N	118〈袖無し＋兜＋ブーツ〉	1
			W		0

表 3

〔 〕の内数は確実でないもの

項目、総数	フリーズ面	人 数
長袖 8	S	0
	N	8（＋Ba 2 ?）
	W	0
キトンのみ（Ⅱa＋b＋c＋d） 34〔2〕	S	18
	N	13〔1〕
	W	3〔1〕
エクソミスⅢ 4〔1〕	S	1
	N	〔1〕
	W	2
クラミュス※（Ⅰ＋Ⅲ＋Ⅳ＋Ⅵ b＋Ⅶb） 71〔1〕	S	27
	N	27〔1〕
	W	17
皮衣Ⅴ 7	S	6★
	N	0
	S	6★
胸甲（Ⅵ＋Ⅶ） 19〔1〕	S	13★〔1〕
	N	2
	W	4

※裸体タイプもクラミュスをつけているので、ここに含む。



1. 北フリーズ [N XLVII] (大英博物館)
左からN133,134,135,136



2. 北フリーズ [NXXXIV] (アテネ、アクロポリス美術館)
左からN89,90,91



3. 南フリーズ [SIII] (大英博物館) S 8



4. 西フリーズ [WV] (バーゼルの彫刻館の石膏コピー)
左からW 9,10



5. 西フリーズ [WXIV] (バーゼルの彫刻館の石膏コピー)
左からW26,27



6. 西フリーズ [WXV] (バーゼルの彫刻館の石膏コピー)
左からW28,29



7. 西フリーズ [WII] (バーゼルの彫刻館の石膏コピー)
左からW 2, 3



8. 北フリーズ [NXLIII] (大英博物館)
左からN119,120



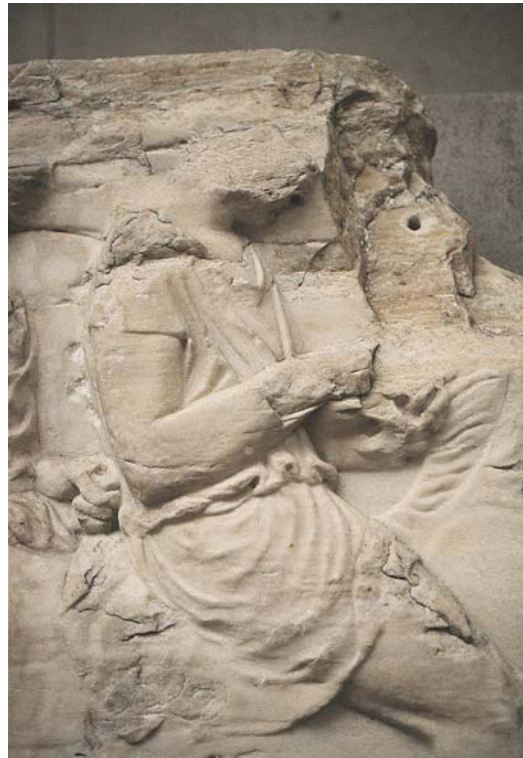
9. 北フリーズ [NXXXIII] (大英博物館) N88



10. 南フリーズ [SXXIII] (大英博物館) S57



11. 北フリーズ [NXXXVI]
(アテネ、アクロポリス美術館) N98



12. 南フリーズ [SXXIII] (大英博物館) S59



13. 南フリーズ [SXIX] (大英博物館) S50



14. 北フリーズ [NXXXVI]
(アテネ、アクロポリス美術館) N99



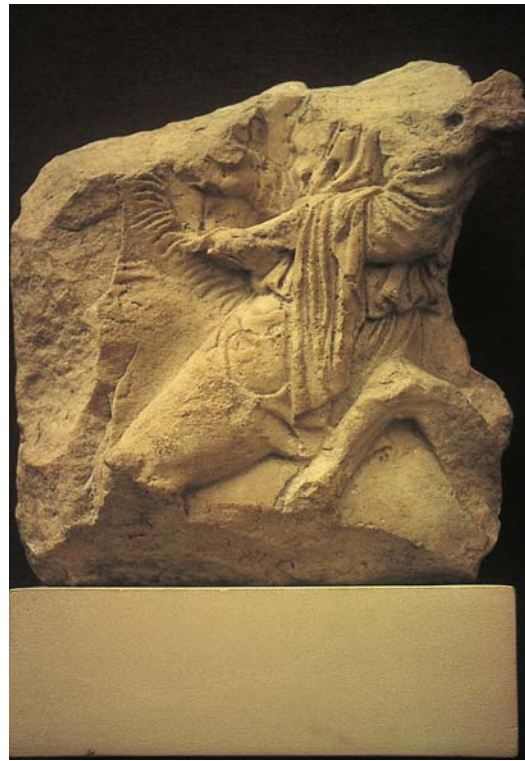
15. 北フリーズ [NXXXVII] (大英博物館) N101



16. 北フリーズ [NXL] (大英博物館) N110(細部)



17. 北フリーズ [NXLVII]
(大英博物館) 左からN135、N136



18. 北フリーズ [NXXX] (大英博物館) N79



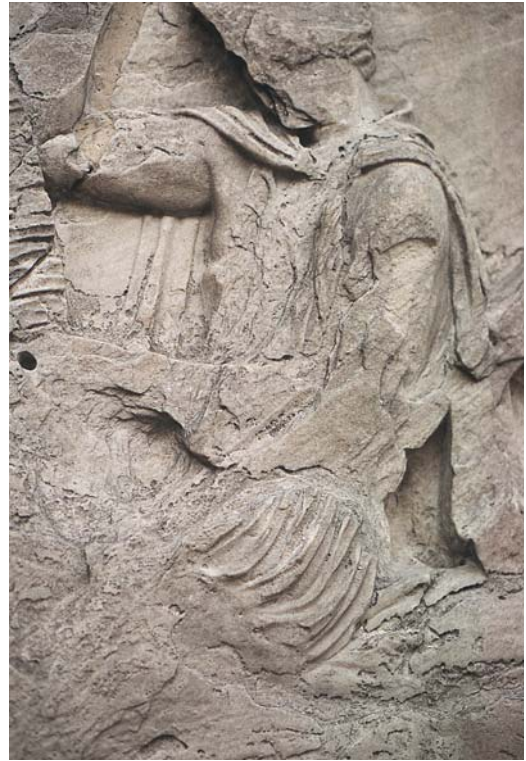
19. 北フリーズ [NXXXIX] (大英博物館) N106



20. 北フリーズ [NXL] (大英博物館) N110 (全体図)



21. 北フリーズ [NXXXIX] (大英博物館) 左から
N103,104,105,106,107



22. 北フリーズ [NXLV] (大英博物館) N127



23. 西フリーズ [WIV] (バーゼルの彫刻館の石膏コピー)
左から W 7, 8



24. 西フリーズ [WVIII]
(バーゼルの彫刻館の石膏コピー) W15



25. 西フリーズ [WX]
(バーゼルの彫刻館の石膏コピー) 左からW18,19



26. アテネ、アゴラ博物館 騎馬競技優勝記念奉獻浮彫断片
(I7167)



27. アテネ、アゴラ博物館 騎馬競技優勝記念奉獻浮彫断片
(I7167) 細部



28. 西フリーズ [WXII] (バーゼルの彫刻館の石膏コピー)
左からW22,23,24



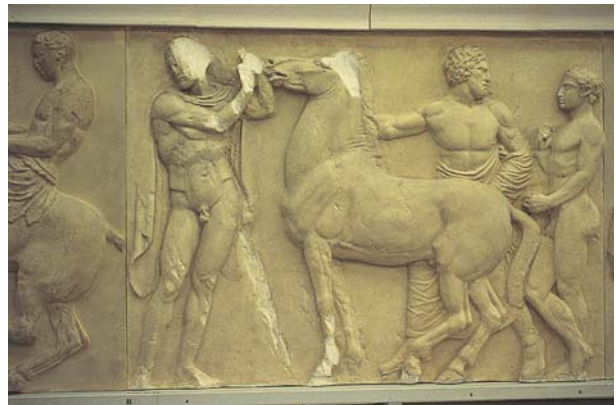
29. 西フリーズ [WXI] (バーゼルの彫刻館の石膏コピー)
左からW20,21



30. アテネ、アゴラ博物館 騎馬競技優勝記念奉獻浮彫断片
(I7167) 細部 (断片右端の人物)



31. 西フリーズ [WVII] (バーゼルの彫刻館の石膏コピー)
左からW13,14



32. 西フリーズ [WIII] (バーゼルの彫刻館の石膏コピー)
左からW 4, 5, 6



33. 西フリーズ [WVI] (バーゼルの彫刻館の石膏コピー)
左からW11,12



34. 北フリーズ [NXXXIII] (大英博物館) N87